ICT 海外ボランティア会会報
No. 82

2018 年 8 月 1 日（水）

URL: https://ictov.jimdo.com （2017 年以降の分）
http://www.ictov.jp （2016 年以前の分）
EML: info.ictov@network.email.ne.jp

目次

◆特別寄稿
NTT 西日本国際室の活動
前 NTT 西日本技術革新部国際室長
現 NTT 西日本ビジネスフロント(株)
取締役企画総務部長　福迫　英司氏

◆海外実践マネジメント
今も継続・拡大する Smart・PLDT プロジェクト(7)
元 PLDT ﾁｰﾌｵﾍﾟﾚｰﾃｨﾝｸﾞｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞ
元 NTT アメリカ社長
現(株)ハイホーCEO　鈴木　武人氏

◆海外グラフィティ
演歌考―石川さゆりの「天城越え」―
ふるアメリカに袖はぬらさじ
日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智氏

◆海外 ICT 事情
ドバイ、警察はロボットに：「ロボコップ」の世界が現実に
佐藤　仁氏

◆海外便り
スペイン・モロッコ俳句紀行(2)
元 JICA ｼﾆｱ海外ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ　北垣　勝之氏

◆第 36 回海外情報談話会模様　事務局

◆第 37 回海外情報談話会開催のご案内　事務局

特別寄稿

NTT 西日本国際室の活動

前　西日本電信電話株式会社技術革新部国際室長
現　NTT 西日本ビジネスフロント株式会社
取締役　企画総務部長　　福迫　英司

ICT 海外ボランティア会のみなさま。

前　NTT 西日本国際室長の福迫英司です。2016 年 7 月より本年 6 月末までの 2 年間、国際室長として様々な活動を行ってまいりました。この度、会報へ寄稿する機会をいただきましたので、その活動の一部をご紹介させていただきます。

(1)　概要

NTT 西日本では、これまで日本国内において培ってきたスキル・ノウハウを活用し、各国の情報通信分野発展を目的として、海外での技術協力活動・コンサルティング活動に取り組んでまいりました。

近年、国内クライアントのグローバル進出、海外 IT ベンダとの連携、NTT グループや国内パートナー企業の海外事業拡大などグローバルに関わる事業環境は大きく変化しています。NTT 西日本は、昨年、それらの変化に対応するため、「スキル・ノウハウの海外展開」活動に加え、「国内ビジネスのグローバル化対応」、「NTT グループのグローバルビジネスへの貢献」、「（グローバル）人材育成」という 3 つの要素を加味したグローバル戦略を策定し、引き続き海外での活動を推進しています。活動の特徴は、NTT グループ各社や国内でのパートナー企業の皆様と連携した「チームジャパン」での取り組みを行っていることです。

(2)　各国での活動

国際室の活動の中心は、スキル・ノウハウの海外展開です。ここではフィリピンを例にその活動をご紹介いたします。

フィリピンでは、光ファイバネットワークインフラ構築の気運が高まっており、NTT 西日本はフィリピン最大手の通信会社である PLDT 社へのスキル・ノウハウ展開を軸に活動を行っています。

NTT 西日本は、2012 年の開通業務フローのコンサルティングを手始めに、2014 年に開通工事の技術研修を、2016 年にはスーパーバイザ向け研修を実施しました。PLDT 社の光回線は約 100 万ユーザと拡大しており、NTT 西日本はその展開に貢献してきました。

最近では、今後 PLDT 社が直面するであろう設備の有効活用という課題の対処策として、日本の得意な技術であり、日本では幅広く使われている 1000 心超の HD (High-Density)ケーブルの導入を提案しました。提案に当たっては、通建会社、線材ベンダと連携したチームジャパンで、PLDT 社の CTO、COO を招いた技術検証(PoC)を実施し、

高い評価をいただきました。現在では、正確な設備データベース構築のための業務プロセス改善コンサルティングの提案を行っています。開通技術移転だけでなく、材料選定から業務プロセス改善に至るまで、様々な形で FTTH の展開に貢献しています。

写真：開通工事の技術研修

写真：経営幹部を招いた HD ケーブルの PoC

同様の提案活動を他の国でも行っていますが、それはクライアントであるキャリアへの貢献になるだけでなく、そのアクセス網を使っている NTT コミュニケーションズへの貢献にも繋がっています。また、これらの活動は NTT 西日本単独で行うのではなく、NTT コミュニケーションズ、everis などの NTT グループ各社や、通建会社、線材ベンダなどの国内パートナー会社と連携して行っています。

フィリピンでは、他にも様々な国際協力活動を行っています。「総務省-フィリピン情報通信技術省 ICT 協力委員会(MDICC)」では、フィリピン情報通信技術省など関係者に対して、日本のブロードバンド整備方式や NTT 西日本の防災への取り組みを紹介しました。また、国土交通省主体の開発支援機構である JOIN とフィリピンの基地転換開発公社で進められている、クラークグリーンシティ構想におけるマスタープラン策定にも協力しました。

写真：「フィリピン情報通信技術省 ICT 協力委員会（MDICC）」での講演(筆者)

(3) 国際協力活動

NTT 西日本では政府機関等からの要請に基づき研修生を受け入れ、各国の情報通信分野の発展に貢献しています。そのひとつが APT(Asia-Pacific Telecommunity)からの研修生受け入れです。アジア太平洋の通信キャリアの管理者等に対して設備設計や保守等の業務紹介、とう道などの設備見学、故障切り分けの実演など、現場での体験を通じた研修プログラムを実施しています。体系的な人材育成や計画的な保守更改工事、ネットワークの遠隔監視など、多くの点で参考になったと毎年好評のプログラムです。

写真：APT からの研修生受け入れ

(4)　グローバル人材育成

グローバル活動は、すべてその活動を支える人材がキーファクタです。また国内のビジネスにおいても、海外 IT ベンダとの連携の必要性が高まるなど、グローバルな視点・スキルを持って業務を行う人材が求められています。

NTT 西日本では、グローバル人材を「グローバルスタンダードなスキルを持ち、国内外問わずビジネスを遂行し競争力を確保した価値を生み出すことのできる人材」と定義し、8 年前よりグローバル人材育成研修を実施しています。

(5)　おわりに

海外のキャリアやパートナーとビジネスをする中で、海外のスピード感に圧倒されることもしばしばです。一方で、私たちが当たり前と認識している品質や、長年の FTTH サービスの運用で直面してきた数多くの課題とその解決策は海外キャリアから見ると非常に価値の高いものであると感じています。

光インフラのニーズが、５Ｇの展開や新興国の所得向上などに伴い、これまで以上のスピードで急拡大するということは議論の余地はないと思います。NTT 西日本国際室は、これからもそのニーズに対応し、NTT グループやパートナー企業と連携して海外キャリアと Win-Win-Win の関係を築く、そのような活動を続けてまいります。

最後になりますが、会員の皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈りしております。

以上

＜事務局注＞ご寄稿者への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。
https://ictov.jimdo.com/home/特別寄稿/

今も継続・拡大するフィリピンの Smart・PLDT プロジェクト(7)

―『NTT を巡るグローバル環境の変化』日米貿易摩擦、AT&T 分割・再編、そして NTT のグローバル化へ―

元 PLDT ﾁｰﾌｵﾍﾟﾚｰﾃｨﾝｸﾞｱﾄﾞﾊﾞｲｻﾞ
元 NTT アメリカ社長
現　株式会社ハイホーCEO
鈴木　武人

４：Smart の移動通信サービス

Smart Communications は当初フェルナンド氏とベア氏の二人が TV 局を作るとして資金を募って立ち上げたベンチャで、急遽免許が手に入るとの事で通信に鞍替えしたものです。携帯通信事業を開始するにあたり、当初基地局等の通信設備が安く手に入る事を理由に、ヨーロッパ方式の旧式アナログ E-TACS を中古品も含めて導入していました。したがって、その将来性は各方面から疑われていました。通信は設備産業ですから、直ぐに資金が不足し、結果、サリムグループ傘下の香港 FPC、またここを経由して NTT に資金を求めたのです。

ただ、当初の GSM や CDMA は CODEC 等技術が未熟であったせいか音質が悪く、また基地局の展開も不十分であったため瞬断が多くて、あまり好評ではありませんでした。特に地方では数十 km という長距離をカバー出来たアナログ（大ゾーン＝基地局を高い位置に立てる事でカバー範囲を広げる）が案外好評で、これに後程述べる理由から先行的に長距離料金の廃止をした事や、当時は常識外であったプリペイド(カード)を積極的に展開した事で、マーケットシェアを得て行きました。

移動・固定を問わず、いずれの通信会社も経済的に豊かなマニラとセブにサービス設備を集中し、顧客の争奪戦を演じていました。膨大な資金を要する固定網の設置義務を WLL の導入と義務の解釈から、その頚木から逃れる事が出来、投資を携帯通信事業に集中する事が出来、Smart の経営が着任 2 年目の中半頃にやっと軌道に乗った感じがして来ました。取締役会メンバーの父親の葬儀の為にルソン島の南 100 km 程の地方都市バタンガスに参りました。教会から出て埋葬の場に集合した際、やはり参列していた同市の市長から『Smart の携帯電話を買ったのに使えない』と嘆かれました。たまたま Smart の取締役会メンバーが揃っていた事から、急遽その場で取締役会を持ち、基地局を設置する事としました。即決断行、セブ島との中継マイクロ網が近くを通っていたことから、これを利用して基地局をたった 1 週間で開通しました。

これは Smart にとって重要な経営上の転機をもたらしました。それはその基地局に期待していなかった非常に高いトラフィックがあったことです。直ちに基地局を更に 2 つ増設する事にしました。其の経験から地方の中小都市に高い通信ニーズがあり、さらに高収入となる国際通信が多い事を知り、アナログ携帯が長距離をカバーできることを合わせ、Smart は競争者の居ない地方に積極的に展開する事としました。

地方都市への展開では多くの場合、大歓迎を受け、基地局の設置やマイクロの設置もスムースに出来ました。ただ、マイクロの中継設備の設置には苦労がありました。島と島をマイクロで繋ぐのですが、その設置には島で一番高い山(幾つかは火山)の稜線に設置する事になります。けっこう大きな島でも人の住む部分は港の回りに限られており、ルソン島のすぐ南西側、小野田少尉が隠れていたルパング島をはじめ、未開の部分が多く、驚く問題があります。その様な問題の一つは、若王子三井物産マニラ支店長誘拐事件を起こした共産系ゲリラ(NPA)でした。彼等は自分たちが正当な政府と名乗っており、『事業をするなら自分たちの政府に税金を払え』との論理で、これに合意しないと破壊されることとなりました。正規には軍や警察の力を借りて対応するのですが、いつも上手く行くとは限りませんでした。

ミンダナオの西部はインドネシアやマレーシアに海峡で接しており、海を通しての人の行き来には明確な国境が無い状況と言ってよいでしょう。ただ、通信は地理に関係なく明確な国境がありますから国際通信となります。したがって、この地域には国際通信のトラフィックが高い事が魅力で、一番端のスルー列島までもネットワークの拡大を図りました。この地区には米国での同時多発テロ『911』を起こしたとされるオサマ・ビンラディンの弟家族が潜入して活動しているとの情報も有り、さすがに自分自身で訪れる事はしませんでした。尚、この 2001 年の『911』事件は、NY で予定をしていた PLDT の社債のリファイナンス(借換え)の機会を流してしまい、一時期財務的に非常な困難をもたらしました。

最終章の『怖かった話』で紹介させていただきますが、このオサマ・ビンラディングループへの米国の殲滅作戦が、私も含めた PLDT 等代表団にたいする米国 FBI の追跡からの解放に結びつくとは、この時点では誰も考え付かなかった事は言うまでもありません。

遠隔地では衛星中継の VSAT も利用して基地局を設置しましたが、コストやサービス品質の上からもマイクロウエーブを伸ばすにしくはありません。熱帯の海上をマイクロで繋ぐ為、ほぼ 10 km 毎に島伝いに中継所を設ける必要が有りました。水蒸気や反射の影響を避け、また距離を稼ぐため、島の山頂、あるいは稜線に設置ことになります。この様な島伝いの中継設備の構築には電力どころかアクセスも無い所が多く、その場合ヘリコプターで機材を運びました。運転に必要な発電に用いる燃料等は地元の人にボッカの様に肩に担いで運んでもらうほかは無く、数日に 1 回注油するよう委託しました。ただし、ヘリポートが無い、パイロットの判断で着陸するヘリコプターによる実査や工事にはかなりのスリルと危険が伴いました。ある島の山頂近くに無事着陸し、ローターを停止したら、上空からは気付かなかった長い草がローターに届く程に立ち上がり、その場で半日草刈に追われた事も有りました。フィリピンは台風の発生源であり、また通り道でもありますから中継所の維持は大変です。台風でマイクロのアンテナが曲げられたり、タワーが倒されたりした事も有りましたが、ヘリで駆けつけた際、現地のエンジニアがへし曲がった鉄塔によじ登って先端にロープを掛け、ウインチで引っ張って次の島との間を鏡で修正する等、現地のエンジニアは実にタフでした。

地方への展開で、特にコタバト州のイベントと合わせた開通式では州知事をはじめ、盛大な歓迎を受け、一緒にパレードした事や美人コンテストの審査員として参加した事は素晴らしい思い出となりました。パレードはバランガイ(部落)毎に特徴のある衣装で踊りを踊りながら競技場を練り歩くもので、夫々の文化や生立ちを示すようなものも有りました。また、美人コンテストは予選で十数人に絞り、その後は個人毎に演説、歌、ダンスの他に特技を紹介して総合得点で選ぶ本格的なものでした。競技場も美人コンテストの大ホールも、実際には未完成の様子で、観客席が無くて観客が箱を持ち寄って席を作っていたり、大ホールの屋根が半分しかなかったり、途中、発電機の燃料を補給する為停電したりと、Smart の最初の電話交換局を作った時の事を思い出させる微笑ましいものでした。(次号に続く)

＜事務局注＞ご寄稿者への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

https://ictov.jimdo.com/home/海外実践マネジメント/

海外グラフィティ

演歌考―石川さゆりの「天城越え」－

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

数ある演歌のうち、一番人気が石川さゆりの「天城越え」との説がある。他の歌手ではなく、「女の情念」を歌い上げたら天下一品の「石川さゆり」のそれでなくてはならない。実際、吹き込んだ当時、石川は、人生の機微を謳うには若すぎる若干２８歳であった。

作曲家・弦哲也と作詞家・吉岡治がタッグを組んで、それこそ、伊豆の山荘で作り上げた。数々のヒットを飛ばした吉岡治であるが、冒頭の「隠しきれない移り香が、いつしかあなたに滲みついた」の次のセリフ「誰かに盗られるくらいならあなたを殺していいですか」のたった一行がこの曲の全てを物語る。そら恐ろしい文句である。そしてこれが作詞家・吉岡の真骨頂と言っていい。

伊豆半島の中央部で、静岡県伊豆市と賀茂郡河津町の境である「天城峠」が舞台であるが、下田に抜けるこの道をテーマとした主な文学作品が、①川端康成の「伊豆の踊子」と②松本清張の「天城越え」である。

「伊豆の踊子」は映画化され、著名な女優たちが一度は通る「登竜門」的なものであるが、内容は、松本清張の「天城越え」とは、真反対の純愛ものと言ってよい。主人公は、２０歳の一高生と１４歳のまだ幼さのこる旅芸人一座の踊子だ。

これと対照的なのが、「天城越え」である。登場するのが、男１４歳の印刷工、女は少年の母を思わせる美しい売春婦ハナである。草むらで情交を重ねたハナだが、相手の土工が殺される。結局釈放されるが、真犯人は実はその「少年」だと清張は読者に推理させる。

ほのかな、恋心を抱いた少年は、土工にハナを盗られたと感じたのであろう。そして、少年が土工を殺した。推理小説らしい証拠品を清張は巧みに提示している。現場に残された足跡が、ハナと少年の物が同じ「九文半」なのだ。

作詞家・吉岡治が感銘を受けたのが、清張の「天城越え」で、土工にハナを盗られたと感じた少年の心情を謳った次の歌詞に、作詞上スランプ気味だった吉岡が賭けたのだった。

「誰かに盗られるくらいならあなたを殺していいですか」。（完）

＜事務局注＞ご寄稿者への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。
https://ictov.jimdo.com/home/海外グラフィティ/

ふるアメリカに袖はぬらさじ

日本ﾍﾞﾝﾀﾞｰﾈｯﾄ社長　ｴｯｾｲｽﾄ　田上　智

有吉佐和子の戯曲だが、明治座で大地真央主演の芝居を観た。幕末、新開地ともいうべき横浜が舞台。開国か攘夷かで国論は二分。支配階級の武士がそのどちらかで争っていたのだが、町人も生業によっては、そのどちらかを選ばざるを得なかった。つまりは、クライアントたる武士を引き寄せるには、次第に旗色鮮明にしてゆくことが必要だったのだ。

例えば、遊郭。数ある遊郭の中で、岩亀楼（がんきろう）がそのステージである。外国人相手の芸者（らしゃめん或は、「唐人口」と言われたが)、と日本人を客とする日本人口の両方をそろえた遊郭だったが、看板の花魁・亀游が、アメリカ人を相手とするのを拒み、その場で自害したのをきっかけとして、攘夷派に楼主が経営方針を転換。逆に、亀游を死後もレガシーとして使い、病気がちな亀游を世話していた主人公芸者お園は、亀游伝説をさらに膨らませていった。そして、虚像と実像とが次第に境目もはっきりしなくなっていった。

亀游が辞世の句と称して、使った「露をだに厭ふ大和の女郎花、ふるあめりかに袖は濡らさじ」から、後半の部分を有吉佐和子がこの戯曲のタイトルとして使ったのだが、はたしてこの句はどこから引用したのだろうか？

どうやら、幕末の戯作者・染崎述房の「近世紀聞」のなかの一節を基にしたものらしいということが、磯田光一氏の解説で分かった。岩亀楼も実在した遊郭のようだ。神奈川県立図書館に「横濱港崎廓岩亀楼異人遊興之図」として残っている。それをみると、外国人が芸者の三味線に合わせて足を上げて楽し気に踊っている様子が見て取れる。

有吉佐和子は、自身の短編「亀游の死」を杉村春子のために戯曲化したものだが、その後、坂東玉三郎や水谷八重子といった名優たちに引き継がれた。その坂東玉三郎が、お園を描写した一文が見事だ。「実際、吉原から横浜に流れてきた芸者お園は、ほんとうに明るく愉快な女なのです。実に様々な人生の経験をしてきて、どんな状況にも対応できる女でもあり、しかも大のお酒好きです。人生の垢を舐めつくした人間であって、百戦錬磨、状況をかぎ分けて平気で作り話もします。世の怒涛にどんなに踏みにじられても起き上がり、たとえ戦車のキャタピラに轢かれても、それでも立ち直っていく女だろうと感じます」と。

実際、お園は、初めは単なる廓の裏方である三味線芸者に過ぎなかったのにも関わらず、次第に、伝説のおいらん「亀遊」の語り部として、岩亀楼に無くてはならぬ存在になってゆく。舞台では、本当に弾けるのかなと心配した大地真央がちゃんと三味線を演奏している。大地真央の祖母が淡路島生まれで、浄瑠璃三味線をよく弾いていたよし、これも血筋だろうか？かつて、評判になった映画「戦場のピアニスト」で、ピアノには全く素人の主演俳優が見事にピアノを弾きこなしていたのを思い起こす。

余談だが、ＪＲの関内（かんない）という駅名は、どうやら、時代に押されて急遽造成した横浜の出島「外国人居留地」Yokohama Foreign Settlement への関門の内側という意味の名残らしい。(完)

＜事務局注＞ご寄稿者への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。

https://ictov.jimdo.com/home/海外グラフィティ/

海外 ICT 事情

ドバイ、警察はロボットに：「ロボコップ」の世界が現実に

佐藤　仁

ついにロボコップの時代へ

アラブ首長国連邦（UAE）のドバイでは自動運転のバスの走行試験や、自動運転車だけでなく、「空飛ぶタクシー」と呼ばれている、パイロット不在で、自動運転で飛行する1人から数人乗りの飛行機の導入にも積極的だ。

そして、ドバイ警察は2017年5月に、警察ロボットを正式に採用することを発表。ドバイ警察のリリースのタイトルは「ドバイ警察、UAE初の"ロボコップ"を採用（Dubai Police recruit UAE's first 'Robocop'）」だった。ついにロボコップの時代がやってきた。

ドバイのロボット警察の初仕事は同国で開催されていたセキュリティカンファランス「Gulf Information and Security Expo」での会場案内だった。ロボコップの胸にはパネルが搭載されており、アラビア語、英語に対応した地図が表示されていた。将来はロシア語、スペイン語、中国語、フランス語などにも対応するようだ。またロボコップに搭載されたカメラでは人間の顔認識も可能で、不審な人物を特定すると、その動画が警察に送信される。さらに、交通違反の罰金の取締りも行い、ロボコップ経由で罰金の支払いができる。2020年までにはドバイのあらゆる所にロボコップを配置していくことを予定している。

2030年までに警察業務の25%をロボットが実施

ロボコップは、身長170cm、体重100kg、バッテリーでの持続時間は8時間。ロボットなのでバッテリーを充電すれば24時間稼働は可能で、ドバイ警察も「ロボットなら病気で休むことも、産休をとることもなく24時間働いてくれる」とコメントしている。2030年までにドバイでは、警察業務の25%はロボットに置き換える予定だそうだ。人件費削減にもつながる。

ロボットは3D業務といわれる「単調：dull」、「汚い：dirty」、「危険：dangerous」の任務に適していることから、軍事面や警察での利活用が期待されている。特に人間の目の行き届かないところまでロボットなら監視できることから、監視や偵察のような業務は人間よりも適している。また危険物の処理を実施する際にも、人間の場合は、危険物処理を行う人の人命にかかわるが、ロボットにはその心配がないので、危険物処理の業務も人間よりもロボットは適している。

（図１）2017年5月公開のロボコップ

（出典：ドバイ当局のツイッターより）

ドバイ警察によると、2年後には犯罪捜査時に人間が操作する時速80kmで走る、体長3メートルのロボコップを導入する計画も明らかにしている。3メートルのロボットに追われるのは逃亡する犯人にとっても脅威だろう。

「ドローン搭載自動運転パトカー」も

ドバイ警察の取組みはロボコップだけではない。2017年6月に、ドローン搭載の自動運転パトカー「O-R3」を導入することを明らかにしている。完全自動運転なので、人は乗らないので、車体は全長120cm、幅60cmと小さい。そのため小回りも効くし、細い道にも入って行くことができる。パトロールを目的としており、車体には高精細カメラ、赤外線画像装置、レーザースキャナー、光検出測定装置などを搭載しており、100メートル先の物体も認識できる。顔認識も可能で、指名手配の犯人を検知した時の追跡と通知も可能。さらに街の中にある不審物や持ち主不明の荷物などを検知すると、その情報を警察のコントロールルームに送ることもできる。

（図2）ドバイ警察が導入予定している
ドローン搭載の自動運転パトカー

（出典：ドバイ当局のツイッターより）

自動運転のため、24時間365日休まずにパトロールが可能。容疑者を検知したら、追跡もできるが、自動車では入ることができない場所に容疑者が逃走した場合には、パトカーからドローンが出てきて、容疑者を追跡していく。自動運転パトカーは、パトロール目的で開発されているため、時速15kmと遅い。そのため、容疑者が自動車やバイクで逃走した場合はドローンでの空からの追跡を行うか、監視しているコントロールルームに通知が行き、実際の人間の警察官がパトカーで追跡することになる。

ドバイ警察では、ドローン搭載自動運転パトカーを2020年までには100台導入する予定。ドバイ警察のAbdullah Khalifa Al Marri氏は「ロボットや自動運転パトカーなどを増強し、警察官を配置しないでも街を平和にしていく」と述べている。

「空飛ぶバイク」で交通渋滞監視とレスキュー

（図3）ドバイ警察が導入予定している
「空飛ぶバイク」

（出典：ドバイ警察のツイッターより）

さらに、ドバイ警察では2020年までにホバーバイクを導入することを2017年10月に明らかにしている。ホバーバイクとは、いわゆる「空飛ぶバイク」のことで、時速70km、1人乗りで上空5メートルの高さまで25分間の飛行が可能。

ホバーバイクにはカメラも搭載されており、上空から360度撮影することができる。撮影された映像は監視センターに直接送信

されるそうだ。ホバーバイクはまずは上空からの交通渋滞の監視と緊急時のレスキュー目的として活用することを想定しており、ホバーバイクでの犯人追跡まではしない。

ロボット導入で変わる社会と新たな課題

現在の世界規模でのロボットや自動運転技術の発展を見ていると、ドバイ警察が取り組んでいるロボコップや自動運転パトカーはいずれ世界各国の警察でも導入が進むだろう。ロボットに代替できる業務はロボコップが担当するようになり、人間の警察官は人間にしか出来ない業務に集中できるようになる。従来の人間の警察官ではできなかったような業務もロボコップなら文句も言わずに 24 時間働いてくれる。

ロボットや自動運転の発達によって、人間の生活や仕事は大きく変わる。利便性も向上し、効率化やコスト削減が推進されるだろう。だが一方で、ロボットは機械だ。突然、故障するかもしれないし、悪意ある者に乗っ取られて、誤った行動をする可能性もある。例えば本来、市民を守らなくてはならないロボコップが、人間を攻撃してくることも想定される。

さらにドバイの経済はバングラディッシュやフィリピンなどから来る多くの移民労働者によって支えられている。彼らが現在、タクシーの運転手や、掃除、工事現場での作業、家政婦などをして働いている。それらの仕事の多くはロボットによって代替される可能性が高い。急速なロボットの進化は移民労働者の仕事を奪うことにもなる。仕事を失った若者や移民らは犯罪に走る傾向が強い。これはドバイだけの話ではなく、世界共通の課題だ。人間が罪を犯して、その人間をロボコップが追跡し、ロボコップに逮捕されるようになるという皮肉な社会がやってくるかもしれない。

以上

＜事務局注＞ご寄稿者への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。
https://ictov.jimdo.com/home/海外 ict 事情/

海外便り

スペイン・モロッコ俳句紀行(2)

元 JICA シニアボランティア
現千葉県 JICA シニアボランティアの会
北垣　勝之

骨埋めるマラガ居よいか住みよいか

厳寒のマドリッドからアヴェ特急で 3 時間弱、地中海の港町マラガに着けば、そこは常夏の地、ブーゲンビリアやハイビスカスが出迎えてくれる。私にとっては 7 年ぶりのマラガであるが、駅舎はモダンなショッピングモールに包まれすっかり様変わり。そして街中は所々工事中で以前と変わらぬ活気が伝わってくる。心地よい潮風を受けてヤシ並木の海岸通りから、カテドラルやアルカサバ要塞を眺めつつ、まずはヒブラルファロ城へと登っていく。マラガを一望するビュウスポットがあるからだ。岸壁にガントリークレーン、大型フェリーも、眼下の円形闘牛場は昔のままだ。行き交う若者たちは半袖短パン、崖斜面のサボテンには熟れたノパールの実、南国ムードを満喫したところで、ピカソゆかりの旧市街に向かう。

繁華街の人混みから突然「日本人ですか」と呼び止められる。通りすがりの私たちの会話を耳にして、マラガ在住 15 年の T 氏夫妻が声を掛けてきたのだ。栃木県出身、温度計営業の縁で当地に来て住みついてしまったという。間口 3m 余りの住居に奥さんと二人暮らし、納豆・豆腐・味噌まで自作する生活を営み、とことん現地の人々との交流を楽しんでいる由。私とほぼ同年代だが、一時大病を患うも克服して今は元気な様子。健康面での不安はあるが、このまま住み続け当地で人生を全うしたいという。温暖な気候風土、人情深き土地っ子に囲まれ彼の夢は叶えられることだろう。夢と現実の相克についついのめり込み、人混みの街路で 30 分以上も立ち話をしてしまった。人生は一度だけ、T さんお互い頑張ろう。

荒涼のイベリア原野冬景色
ドン・キホーテ敵は発電風車かな

ベンツ・バスが高速道を快適に走る。風力発電やリゾート開発への過剰投資で、スペイン財政危うしと言われた 7 年前と四囲の情景は変わらない。金融危機も一時の風説に終わるのか、未だ冬景色の残る車窓を眺めつつ地中海沿いにコスタ・デル・ソルを一路アルヘシラスへと向かう。確かに経済は一見立ち直ってきたかに思えるが、政局混乱、高い失業率、財政赤字は続く。頼りは観光産業と農産物だけか。陽光の温もりとは裏腹に本格的春の到来は未だ先のことらしい。山嶺に並ぶ風力発電機が穏やかに回る。オリーブ畑が間断なく続く。スペインの原風景にいつしかハルシオン・ブリーズ(halcyon breeze)の訪れることを信じよう。その昔、ドン・キホーテは粉挽き小屋の風車に向かって槍を突いた。今、彼がいたら過剰投資に空回りする風力発電機に立ち向かうことだろう。

海峡を越えて民度差民族差

難民と紛(まが)うモロカン国境越え

ジブラルタル海峡をフェリーで渡り、スペイン領セウタに辿り着く。モロッコ国境へ向かうため市バスに乗り込む。意外と混雑している。途中のバス・ストップで乗り降りはあったが、ほとんどの乗客は国境を目指した。その近く丘の上で皆々下車する。見通す先に国境事務所はあるが、おびただしい群衆がそこに向かって歩いていく。
各々大きな荷物をもって移動する様は、まるで難民の国境越えみたいだ。彼等に混じって私たちも歩き始める。道路は通関待ちの車両で大渋滞である。バスがはるか手前で乗客を降ろした理由も判った。これはえらいことになったものだと半信半疑で人の動きに付いて行くしかない。係官の規制の下、押し合い圧し合いながら狭い通路を歩く。モロッコ側出口に差し掛かると、当然のことではあるが係官からパスポートの提示を求められた。入国スタンプが押されていないと突き返される。どこそこに行って入国手続きをして来いと言われるが、その場所が分からない。何人か別の係官に尋ねるも人によって言うことが違う。スペイン側とモロッコ側の事務所間を何度か行ったり来たりするうち、難民の群れが幾分少なくなってようやく入国審査小屋を見つけ出す。窓口でパスポートと事前に記入しておいた入国カードを差し出す。係官は端末に記録を打ち込むだけ、終わったら押印したパスポートを返してくる。ついでに隣の外貨両替所で必要最小限の US$をモロッコ・ディルハム(MDH)に交換する。かくしてやっとの思いでモロッコ入りを果たす。

本来このような大混雑はないはずだった。ブログの調べでは皆簡単に入国している。月曜日、モロッコ人の買い出し部隊が帰国する潮どきにかち合ってしまったようだ。スペインとモロッコ間の経済格差は大きく、非課税の物資が前者から後者へと移動する。たとえ一人一人の免税額内物資でも人数が膨れれば多額の物流となる。税関は脱税をチェックする。したがって車両の出入りは特に厳しいが、個人の持ち物には検査が緩い。観光客は査証さえ整えばフリーパス同然である。だがモロッコからスペインへの逆コースはそう簡単にはいかない。当然ながらX線検査のチェックもある。しかし往きは手ぶらで帰りは大荷物の買い出し商売は、民度差による商品価値と貨幣価値のバランスから利益を得る闇市が存在する以上、この国境越え買い出し部隊を根絶させることにはならないであろう。事実、これ等の安価な密輸入品が最寄りのティトゥアンの街には溢れている。ここを拠点にモロッコ中に流通していると思われる。ともあれ、事情は異なるがヨーロッパを目指すシリアやアフリカからの難民移動をも偲ばれる貴重な体験をすることができた。(次号に続く)

＜事務局注＞ご寄稿者への感想、意見、感動などございましたら、下記サイトのコメントボタンよりご記入いただければ幸いです。
https://ictov.jimdo.com/home/海外便り/

談話会の話、あれこれ

第 36 回海外情報談話会模様

事務局

第 36 回海外情報談話会が 2018 年 7 月 20 日(金)15 時～17 時、(一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及び Web TV 会議室において開催された。講師は神永　晉様(SK グローバルアドバイザーズ株式会社代表取締役、住友精密工業株式会社元社長)、演題は「IoT 世界におけるセンサの役割」であった。住友グループの歴史、住友精密工業全体の事業、航空機事業、MEMS 事業、トリリオン・センサ、技術経営まで、幅広くかつ熱く話され、質疑応答も活発であった。

以下にいくつかの話題を列挙する。

・航空機事業は第一次大戦の飛行船ツェッペリン号の破片分析からジュラルミンを製造したことが原点である。その後、プロペラ、前脚、主脚、燃料ヒーター等へ展開した。

・MEMS (Micro Electro Mechanical Systems)事業は IoT の要であり、LSI ではない 3 次元機械構造物のデバイスとして、自動車、プリンター、スマホ等で多数使用される。

・トリリオン・センサは年間 1 兆個のセンサが医療、農業、社会インフラなどの分野で接続され、飢えの解消、ヘルスケアの享受、汚染の除去、クリーンエネルギの確立などを解決し、ほぼ 20 年後に到来する Abundance(潤沢な世界)を実現するものである。

・センサとネットワークにより、膨大な量の情報が得られ、情報の処理(ソフトウェア)、情報の構築(アプリケーション)で大きなビジネスチャンスが生じ、最終的にはセンサへの価値環流が期待される。優れた技術を有する中小企業への利益還流も図られる。

・技術開発と技術経営とは、技術の社会への実装、それによって技術が世界を変える、それは幸せで豊かな生活の実現、それがイノベーションであり、そのイノベーションを実践するのは人財であるということである。

質疑応答は予定時間を超えるほど活発に実施され、“談話”会らしい双方向の刺激的なものとなった。　以上

＜事務局注＞講演資料は、講師のご好意により、下記サイトからダウンロードすることができます。

https://ictov.jimdo.com/home/海外情報談話会/

お知らせ

第 37 回海外情報談話会開催のご案内

事務局

ICT 海外ボランティア会(ICTOV)による第 37 回海外情報談話会を下記のとおり開催いたしますので、ご多忙とは存じますが、奮ってご参加くださいますようよろしくお願い申し上げます。

1. 日時：2018 年 9 月 7 日(金) 15 時～17 時
2. 場所：(一財)海外通信・放送コンサルティング協力(JTEC)及び Web TV 会議室
   東京都品川区西五反田 8-1-14 最勝(さいしょう)ビル 7 階
   JR 五反田駅から徒歩約 5 分(下図のとおり)
   http://www.jtec.or.jp/about/access.html
3. 講師：石原　直様(東京大学名誉教授)
4. 演題：「工学系高度人材育成の動向と海外との比較」
5. 参加費：無料(会員制ではなく、どなたでも参加できます)
6. 申込方法：参加ご希望の方は、下記連絡先にご氏名及び談話会参加希望の旨をご連絡ください。なお、Web TV 会議室への参加ご希望の方はその旨ご記載ください。
   ＜連絡先＞　ICTOV 事務局　info.ictov@network.email.ne.jp

☆工学系高度人材育成について海外との比較を含め、気軽に楽しく談話しながら、学び、考える機会です。乞うご期待！

(注) Web TV 会議室への参加方法は次のとおりです。

① 次のサイトで初回のみ、ミーティング用 Zoom クライアント(サイトの一番上にあるもの)をダウンロードし、インストールする(無料)。なお、Zoom はクラウドベースの Web TV 会議室システムであり、パソコン(カメラ付がよい)、スマホ、タブレットのいずれでも可能です。
https://zoom.us/download

②Web TV 会議室の案内が海外情報談話会開始 5 分前までにメールで届くので、メールで指定された Web TV 会議室に入室する。

会報お読みの方々へのお願い

当会の拡充とともに、会報の充実も図ろうとしております。

このため、会報をお読みになった皆様のご感想、ご意見、ご要望は、会報作成のみならず当会運営にあたっても大きな方向付けに役立ちます。どうぞご遠慮なくお送りくださいますようお願い申し上げます。

＜送付先＞　事務局　info.ictov@network.email.ne.jp　又は

会報担当　村上勝臣　katsumi.murakami@jcom.home.ne.jp

編集後記(編集長から一言)

皆様のご協力をいただき、おかげさまで会報第 82 号を発行することができました。今回は新たに NTT 西日本国際室の活動やドバイのロボコップのご寄稿などもあり、誠にありがとうございました。

今回の海外情報談話会には、仙台からの乗車券を用意し JTEC 会場で参加する予定でしたが突然、鬼の霍乱を起こし、参加できませんでした。雑草のように育ったので体力には自信があったつもりでしたが、楽しみにしていただけに非常に残念でした。海外情報談話会終了後の講師との打上げ会(懇親会)はいつも楽しく有意義ですが、それにも今回参加できず、次回の海外情報談話会には参加できるよう、日頃から健康維持に努めたいと思います。また、当日の資料はダウンロードできますので、遅ればせながら学ぶことといたします。

今後とも当会へのご指導・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

発行：　ICT 海外ボランティア会(ICTOV)
会報担当：　村上　勝臣(編集長兼広報部長)、山川　博久(事務局長)
ホームページ担当：　山崎　義行(報道部長)、安達　信男(幹事)